

日本劍客伝・二

宮本武蔵・司馬遼太郎
小野次郎右衛門・柴田鍊三郎



朝日文庫

司馬遼太郎（しば りょうたろう）
1923（大正12）年、大阪生まれ。

柴田錬三郎（しばた れんざぶろう）
1917（大正6）年、岡山生まれ。
1978（昭和53）年没。

日本剣客伝 2 宮本武蔵・小野次郎右衛門

昭和57年3月20日 第1刷発行 定価 360円
昭和61年6月20日 第3刷発行

著 者 司馬遼太郎・柴田錬三郎

発行者 川口信行

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京 0-1730

© RYOTARO SHIBA & EIKO SAITO 1982
Printed in Japan 0193-260862-0042

日中刺客伝 2

宮本武蔵 小野次郎右衛門

司馬遼太郎 柴田錬三郎

表紙・扉 伊藤 鎌治

目次

宮本武蔵 司馬遼太郎

その生いたち	9
吉岡兵法所	20
一乗寺下り松	33
宝蔵院流	45
異種試合	59
夢想権之助のこと	71
巖流	83
燕を斬ること	96
京の日々	107
小倉	118
山桃	130

決闘 142

巖流島雜記 155

大坂ノ陣 166

北条安房守 177

晩年 189

小野次郎右衛門

柴田鍊三郎

鼠 203

多敵の位 214

目と腰 225

斬ること 236

天才とは 246

一刀流系譜 256

日本劍客伝 2

宮本武蔵

みやもとむさし

司馬遼太郎

『週刊朝日』昭和四十二年六月二十三日号、十月六日号掲載

その生いたち

—

先日、にわかには思いたって、宮本武蔵の故郷へ出かけてみた。

姫路までの車中、たいくつなままに武蔵の筆になる

「枯木鳴鶡図」

という絵の写真版をながめていたが、やはり天才としかおもえない。みごとな潑墨で水辺の茂みがえがかれ、枯木の枝が、天にむかつてのびている。その先頭に、鶡がいる。するどくはげしく鳴き、やがて弦が切れたように鳴きやみ、その瞬間にひろがった天地の枯れはてた静寂というもの、この絵ほどみごとに表出されているものはないであろう。

画家としての武蔵は、鳥を好んだらしい。現存している絵にも、鶡、軍鶏、鷺、からす、そして右のものがある。いずれもみごとなもので、武蔵が兵法者でなく画家として生きても美術史上の巨人として十分にのこりえたにちがひなく、現に画家としての武蔵も（その世界では二天というかれの号でよばれているが）、美術史の世界で十分な待遇をうけている。

筆者は姫路でのりかえた。この播州(兵庫県)姫路は筆者の祖父の代までいた土地で、この点、私事ながら他の土地にきたような感じがしない。姫路で出あった土地の知人が、

——どこへゆく。

というから、隣りの岡山県へゆく、と答えた。なにをしにゆく、と問いかさねられたために、「武蔵の出生地にゆく」

と答えると、武蔵はこの播州の出身ではないか、といわれた。

むろん、播州人の錯覚である。播州は多くの歴史上の知名人を出している。黒田如水、後藤又兵衛、大石内蔵助など、男らしさのなかに一種の美的情感と華やきをもった一連の共通点の濃い人物を出しているが、武蔵が出た村は、播州との国さかにはあっても播州には所属していない。ただ母親が播州人であったという。とすればからだのなかになかば播州の血が入っているかもしれない。

姫路で、姫新線きよたけにのりかえた。国鉄の支線で、なお単線である。列車は、北部の山間地方に入つてゆく。

列車は山間の小盆地をいくつも縫つてすすむが、途中の風景はいわゆる支線的風景で、村々のたたずまいが本線ほどには荒れておらず、古街道の情趣がわずかながらものこっている。

その街道のおもしろさに興味をもち、途中本竜野ほんりゅうの駅で下車し、駅前でタクシーをひろつた。その車で国境の峠を越え、美作盆地みまさかに入り、この夜、岡山県津山市に宿をとった。

まことに幸運な偶然ながら、この津山市で、市主催による展覧会がひらかれていた。「宮本武

蔵と吉川英治展」という主題のもので、吉川夫人も、きのう当地にこられていたという。翌日、この展覧会へ出かけ、前記「枯木鳴鶴図」にも接した。旅で知人に出あったようなおどろきをおぼえた。

そのままこのしずかな城下町を離れ、武蔵の故郷の村へゆくべくむかった。

「武蔵は天才だが、しかし天才が往々にしてもっているいやらしさがある」

と、途中の車のなかで、連れのHさんにいった。そのいやらしさというのはどういうことか、筆者も書きつつ考えねばならないが、いまいえることは、

「もし宮本武蔵というひとがこんにち存生ぞんじやうしているとすれば、私はこのように百里を遠しとせずしてかれのもとにたずねてゆくようなことは、決してしない」

ということであった。武蔵の人間と人生が歴史のなかで凝固し、いわば人畜無害になっているこんにちこそ、私は安心してかれの生地へたずねてゆく。

二

武蔵が生まれたのは、

美作国讚甘郷宮本村

という在所である。岡山県の北東部にあたり、中国山脈のなかの小盆地ながら、村のなかを古街道が通っており、いわば宿場であった。この点、人や文物の往来ゆききはあんがいさかんであったで

あろう。山間部ながら、時勢に鈍感な村ではあるまい。山ひとつ越えれば播州であり、ことばも作州（岡山県）弁というより播州弁にちかい。武蔵も、播州なまりのつよい作州弁をつかったことであろう。

筆者は、宮本村の野みちをあるきながら、そのことを考えていた。途中、道がわからなくなり、むこうからきたオートバイのひとにきいてみた。そのあと、しばらく立ちばなしをした。

「嫁とり婿とりも、山むここの兵庫県とすることが多いですよ」

なるほど、三百八十年前にこの村にうまれた武蔵も、母が山むここの鎌坂峠をこえて播州からきている。

われわれは竹やぶの丘（武蔵の両親の墓のある丘だが）のそばの道——野みちだがむかしの佐用街道——をあるきつつ、やがて台地にのぼった。

「いいオートバイですね」

と、私は、この快活な、笑いじわいっばいで応答してくれる村のひとに、せめてもの愛想をいっただ。お百姓というより、果樹園経営者といった感じのひとで、その稼業がらのせいひどく表情があかるい。念のために名前をきかせてもらおうと、

「新免しんめんです」

「ははあ」

と、私はちょっと、おどろいた。新免とは武蔵のべつの姓である。武蔵は若いころこの姓をこのみ（後述するが）新免武蔵と名乗っていた。

「べつに、武蔵とつながりはありませんが」

とわらったが、宮本村はむかしもいまも三十戸程度だから、武蔵とおなじ血がこの新免さんにもむろん入っているであろう。ついでながらいまの宮本村では、新免や平田といった姓が多いらしい。平田というのは、武蔵の生家の姓である。武蔵は本来、

「平田武蔵」

と名乗るべきであったが、語感のこのみから考えて（そうとしかおもえない）名乗らなかつた。「平尾という姓もあります。あそこに、おじいさんがいるでしょう」

と、新免さんは、指さした。ついでながらわれわれはすでに宮本村を見おろす台地にのぼっており、新免さんはこの台地のちょっと横をさしている。畑があり、むぎわら帽をかぶった老人が鋤をつかっていた。

「あのひとは、平尾さんです。八十をこえています」

と、いつてから、言いわすれたことをいうような調子で、

「あの平尾泰助さんは、武蔵の姉さんのおぎんさんの子孫ですわ。おぎんさんからかぞえて十五代目になります」

なるほど、宮本村は世間せまく、三十戸の家々はどうかやら一族同士のようすがたであるらしい。

台地を降り、その平尾老人の屋敷の、みほし庭に無断ながら入りこんでみた。家は県の史蹟のようになつており、敷地のなかにあるタラヨウの巨樹は、県の指定天然記念物になつている。

タラヨウというのはどういう字をかくのだろうとおもったが、屋敷に人影がなく、結局帰宅してから百科事典でしらべてみたところ、「多羅葉」とかくらしい。幹が石膏でかためたような、そういう感じのふしぎな樹である。

「樹齡四百年」

というから、武蔵は当然この樹をみたであろう。この姉おぎんの家のすぐそばに武蔵の生家のあとがある。

三

武蔵は、天正の中期、この在所にうまれている。父は、平田無二齋という。

ついでながらこのあたり五千石ばかりの土地の首領は、

新免伊賀守

という者であった。その新免家の系列に属する土地の地侍が、平田将監という者で、宮本村のそばの竹山という峰に山城をかまえ、村落貴族の姿をとっていた。父無二齋はこの平田将監の血縁で、それに仕えている。しかしながら事故があり、地に居ついたらまますらうした。こういうのを当時は地下牢人といったらしい。

この地下牢人の無二齋が、田舎ずまいながらも武芸者なのである。当時は武芸者のことを、「芸者」

といった。無二齋は刀術だけでなく、槍術や小具足（組み打ち術）にも長じていたが、これは当

時の兵法がまだ専門的に細分化せずいわば格闘術一般というものだったから、無二齋はなんでもできたにちがいない。とくに十手術じゅうじゆてに長じ、これがこの人物の自慢であった。

「壮年のころ、京にのぼって足利將軍義昭公の御前で試合をした」

というのが——真偽はべつとして——不遇のこの田舎兵法者の一代の栄光であった。この試合で將軍の兵法指南吉岡憲法けんぽう（世襲名）と技をあらそい、三本のうち二本をとり、將軍から日下無双ひのしたむさう兵術者の号をもらったという。

武蔵は、幼名は弁之助。

おさないころ、この老父から兵法の手ほどきをうけた。以後、武蔵はたれをも師とせずみずから開発しつつ独習したために、無二齋はただひとりの師であった。

「丹治峯均筆記」

という書物を信ずるとすれば、武蔵は幼童のころ、この父の兵法を嘲弄した。というより、根ほり葉ほりその兵法の動作の原理をきいた。

「なぜそのところは、そのように右手を跳ねるのだ」

といったふうふうに小うるさく訊き、ときに無二齋を絶句させた。答えられないばかりか、無二齋にとつて自分の兵法をばかにされているようにおもえてきたらしい。

あるとき、無二齋が一室で楊枝ようじをけずっていた。すると弁之助ひとまが一間をへだてて立ち、なにか小馬鹿にしたようなことをいった。

その瞬間、無二齋は逆上した。楊枝けずりの小刀こがたなを投げたところ、弁之助はかすかに顔をそら